

[Original Paper]

Characteristics of Ego States and Basic Stances of Junior College Students and Tendency of Those who Voluntarily Dropped out of the College

Mayumi Yasui*

* Former First Department of Nursing, Aino University Junior College

Abstract

Mentally unstable students are likely to have problems in relationships with other students, or patients or mentors of teaching in clinical training. Also, it is said that self-esteem has a large influence on their relationship skills.

This research investigated “egograms” and “life positions” to clarify characteristics of ego states of students of a junior college (hereinafter called the “college”) and tendency of those who dropped out of the college.

The result showed that students of the college tend to have an egogram pattern with a higher score of “AC (adapted child)” and lower scores of “self-esteem” and “denial of others.” Students who dropped out of the college in one (1) year from the enrollment showed a lower “self-esteem.” The comparison between the student group who dropped out of the college and the group of those who did not resulted in a significant difference in the average score of “self-esteem.”

Moreover, students who were admitted to the college from an associated junior/ high school showed a lower “self-esteem” and higher “self-denial.” The comparison of this group with the group of those who were enrolled at the college newly from a non-associated high school showed significant differences in the average scores of “self-esteem” and “self-denial.”

It was suggested that relationships which enhance their self-esteem be important in future.

Key Words : egogram, life position, ego state, basic stance, self-esteem

当学院における学生の自我状態や基本的構えの特徴と 自己退学した学生の傾向について

安 井 眞由美*

【要 旨】 精神的に不安定な学生は、学生間や臨地実習での患者や指導者との人間関係に問題を生じやすい。また、人間関係能力において、自己肯定感が大きく影響すると言われている。

本研究は、本学学生の自我状態の特徴や退学に至った学生の傾向を明らかにする目的で、「エゴグラム」と「ライフポジション」の調査を実施した。

その結果、本学学生の自我状態は、「AC（順応の子供）」が優位のエゴグラムが多く、「自己肯定」と「他者否定」が低い傾向がみられた。入学1年以内に退学に至った学生は「自己肯定」が低く、退学に至った学生群とそうでない学生群との比較で、「自己肯定」の平均値に有意差がみられた。

また、内部入学者は「自己肯定」が低く「自己否定」が高い傾向が見られ、内部入学者群と外部入学者群との比較では、「自己肯定」と「自己否定」の平均値について有意差が見られた。

今後は、自己肯定感を高めるような関わりが重要であることが示唆された。

キーワード：エゴグラム、ライフポジション、自我状態、基本的構え、自己肯定感

I. はじめに

最近の学生は自己肯定感が低く些細なことがきっかけで不登校や引きこもり、問題行動を起こすと言われている。当学院でも、学生から「どうせうちらアホやもん」「できひんもん」という発言が多く聞かれ、自己肯定感が低い印象をもった。また、2012年度の看護師2年過程の退学者の割合は、全国で8.7% 大阪府では8.6%であるが、当学院の2012年度卒業時の退学者の割合は19.2%と高い傾向であった¹⁾。

看護は人間相手の仕事であり、人間関係能力が必要である。その人間関係能力において、自己肯定感が大きく影響すると言われている²⁾。自己肯定感は、自分自身の自信や心の安定感、人間関係の構築力に影響す

る。そのため、自己肯定感が持てないと、自分だけでなく他者も受容・共感・肯定することが困難になる。また、精神的に不安定な学生は、学生間や臨地実習での患者や指導者との人間関係に問題を生じやすい。

このように、自己肯定感が持てないと人間関係に問題を生じやすいと言われているが、退学に至る学生の「自我状態」や「基本的構え」が自主退学などの行動と関係があるのかは不明であった。

そこで今回、当学院の学生の自我状態や基本的構えの特徴を知るとともに、自己退学に至る学生とそうでない学生にどのような差異があるのか調査を行ったのでここに報告する。

* 元藍野大学短期大学部 第一看護学科

II. 用語の概念及び定義

- ・エゴグラム：全ての観察可能な行動（言語，音声，表情，ジェスチャー，姿勢，行動を5つの自我状態に分類し，それらの発生頻度（心理的エネルギー）を棒グラフにして示したもので，個人のパーソナリティの鳥瞰図のこと³⁾
- ・ライフポジション：人が自分自身と他者について，どう感じ，どんな評価をしているかという人生の基本的立場（構え）を点数化したもの
- ・自我状態：思考および感情，さらにはそれらに関連した一連の行動様式を統合した1つのシステム（組織）で⁴⁾，自我状態をCP（批判的親）・NP（養育的親）・A（大人）・FC（自由な子供）・AC（順応的子供）の5つで構成すると交流分析では解釈される
- ・心的エネルギー：心的エネルギーは精神的エネルギーともいわれ，何かをしたいと思う衝動の原動力となる本能エネルギー。5つの自我状態の総合した点数で表す
- ・基本的構え：基本的構えは，自己概念と他者概念の理論で，自他肯定，自他否定，自己肯定・他者否定，自己否定・他者肯定の4つに分けられる⁵⁾
- ・基本的立場：ある個人が自分自身と他人の中に知覚する基本的な価値に対してとる，基礎的なスタンスと態度を表したもの⁶⁾で，ライフポジションの結果から基本的構えを，自己他者とも肯定（第一の立場），自己否定で他者肯定（第二の立場），自己肯定で他者否定（第三の立場），自己他者とも否定（第四の立場）に分けたもの
- ・自己肯定感：「自分が自分であって大丈夫」という感覚のこと⁷⁾
- ・エゴグラムの形について，CPを最高とするエゴグラムをCP優位とした。同様にNP，A，FC，ACを優位とするエゴグラムを，各NP優位，A優位，FC優位，AC優位とした。

III. 研究方法

1. 研究対象

2012年4月に本学院へ入学した1学年の学生（以下，学生とする）101名のうち，同意を得てアンケートに回答した94名（93%）。

2. 研究方法

本学の学生に，質問紙「エゴグラム」と「ライフポジション」⁸⁾を用いて2012年4月10日にアンケート調査を実施した（集合調査）。

「エゴグラム」は自我状態の状態を観察するもので50項目の質問からなり，CP・NP・A・FC・ACの内容をランダムに含む。また，「ライフポジション」は基本的構えを観察するもので40項目の質問からなり，自己肯定・自己否定・他者肯定・他者否定の内容をランダムに含む。それぞれに3段階尺度で，質問項目毎に「はい」は2点，「どちらでもない」は1点，「いいえ」は0点とし，CP・NP・A・FC・ACおよび自己肯定・自己否定・他者肯定・他者否定の各点数を集計した。CP・NP・A・FC・AC，自己肯定・自己否定・他者肯定・他者否定のそれぞれの満点は20点で，自我状態のCP・NP・A・FC・ACの合計点を心的エネルギー総量として集計した。また，5つの自我状態の心の働きは，「バランスの取れた本来の働き」と「過剰な状態」「不足な状態」がある。そこで，自我状態の過剰と不足をみるために，最高値20点を100%とし，90%（18点）以上を過剰，中央値50%（10点）未満を不足と設定した⁹⁾。

対象学生の自我状態や基本的構えの状況について，各点数や平均値，優位自我状態や基本的立場の割合，各自我状態の心的エネルギー総量について算出した。

また，藍野高校卒業後本学院に入学した学生（以下，内部入学生とする）71名（1群）と藍野高校以外の高卒業者（以下，外部入学生とする）23名（2群）間や2013年3月までに自己退学した9名（A群）とそれ以外の学生85名（B群）間，男女間の基本的立場の割合や，エゴグラムにおけるCP・NP・A・FC・ACの5つの自我状態と心的エネルギー総量の平均値とライフポジションにおける自己肯定・自己否定・他者肯定・他者否定についての平均値を算出し，それらに対応のないスチューデントt検定にかけ有意差の有無を確認した。

3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては，「研究に関する倫理指針」に準拠し，対象者に対してはあらかじめ本研究の主旨を十分説明した上で，文書による同意を得て実施した。また，同意したあとでも随時参加中止の申し入れを受け入れ，それによって何ら不当な扱いをしないことや質問には随時応じることを説明した。本研究で得られた結果は研究代表者が厳重に管理し，解析に際

して対象者の氏名等の個人が特定されうる情報はすべて符号化（匿名化）し、本研究の目的以外には用いないことを明示した。

IV. 結 果

1. 本学生のエゴグラムとライフポジションの結果

各自我状態の平均値は、表1に示すとおりNPが一番高く13.30±3.73〔SD〕で、CPが10.16±2.97〔SD〕と一番低い値であった。5つの自我状態の総合点数である心的エネルギーは、100点満点中平均58.43±9.90〔SD〕点であった。

どの自我状態が一番高いかエゴグラムの形でみると、図1のようにAC優位が32名、NP優位が28名と多く、CP優位が6名と一番少なかった（同点数で優位のもの9名は重複）。

各自我状態の心的エネルギー分布では、表2のようにCPの過剰（価値を押し付ける私）18点以上は2名（2.1%）、CPの不足（価値付けできない私）9点以下は40名（42.6%）であった。NPの過剰（相手を甘えさせる私）18点以上は9名（9.6%）、NPの不足（相手を思いやれない私）9点以下は16名（17.1%）であった。Aの過剰（理詰め私）18点以上は3名

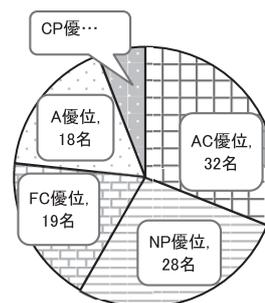


図1 本学生の優位自我状態の割合

(3.2%)、Aの不足（考えようしない私）9点以下は28名（29.8%）であった。FCの過剰（わがまま私）18点以上は6名（6.4%）、FCの不足（楽しまない私）9点以下は26名（27.6%）であった。ACの過剰（合わせすぎる私）18点以上は9名（9.6%）、ACの不足（合わせられない私）9点以下は30名（31.8%）であった。とくにACは、20点満点のものが5名（5.3%）みられた。また、優位エゴグラムごとのACの平均値を比較すると、表3のようにCP優位者11.50±2.87〔SD〕、NP優位者11.43±2.69〔SD〕、A優位者9.11±3.33〔SD〕、FC優位者7.74±3.19〔SD〕、AC優位者15.78±3.03〔SD〕であった。

表1 本学生の自我状態と基本的構えの平均値と標準偏差

対象者	平均年齢	CP	NP	A	FC	AC	心的エネルギー総量	自己肯定	自己否定	他者肯定	他者否定
学生 (n=94)	19.36±2.33	10.16±2.97	13.30±3.73	11.56±3.75	11.68±3.95	11.72±4.40	58.43±9.90	7.50±4.50	12.11±4.60	12.84±5.23	7.86±4.69

表2 本学生の各自我状態の心的エネルギー分布

心的エネルギー		CP		NP		A		FC		AC	
点	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
20	100	0	0	1	1.1	0	0	1	1.1	5	5.3
18~19	90~99	2	2.1	8	8.5	3	3.2	5	5.3	4	4.3
16~17	80~89	2	2.1	21	22.3	10	10.6	13	13.8	15	16
10~15	50~79	50	53.2	48	51	53	56.4	49	52.1	40	42.6
6~9	30~49	36	38.3	14	14.9	23	24.5	20	21.2	20	21.2
4~5	20~29	3	3.2	1	1.1	5	5.3	5	5.3	8	8.5
0~3	0~19	1	1.1	1	1.1	0	0	1	1.1	2	2.1
計		94	100	94	100	94	100	94	100	94	100

表3 本学生の優位エゴグラムごとの自我状態の平均値と標準偏差

	CP	NP	A	FC	AC
CP優位	14.33±2.87	10.67±2.69	9.83±2.97	11.83±3.18	11.50±2.87
NP優位	10.93±2.15	16.46±1.94	11.25±3.96	12.75±2.41	11.43±2.69
A優位	10.06±3.10	12.39±3.71	15.78±1.62	10.72±2.64	9.11±3.33
FC優位	10.58±3.28	12.84±2.81	10.74±3.64	16.37±2.28	7.74±3.19
AC優位	8.84±2.27	12.03±3.73	10.13±3.10	8.94±3.48	15.78±3.03

ライフポジションテストの結果から基本的構えの各平均値は20点満点中、自己肯定7.50±4.50点、自己否定12.11±4.60点、他者肯定12.84±5.23点、他者否定7.86±4.69点だった(表1を参照)。基本的構えを、自己他者とも肯定(第一の立場)、自己否定で他者肯定(第二の立場)、自己肯定で他者否定(第三の立場)、自己他者とも否定(第四の立場)に分けると、第一の立場が24名、第二の立場が47名、第三の立場が3名、第四の立場が20名であり、第二の立場が一番多くみられた(図2を参照)。次の2・3・4における各群の基本的立場の割合は表4に示した。自己肯定より自己否定の点数が高かった第二の立場と第四の立場の67

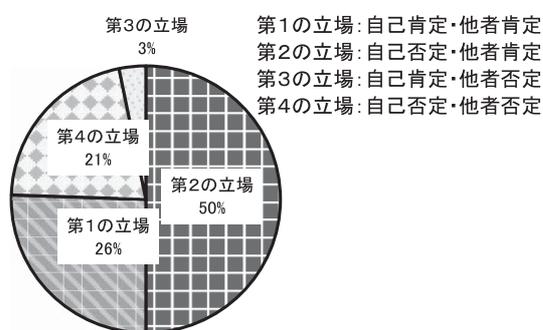


図2 本学生の基本的立場割合

表4 各群の基本的立場の割合

	全員	内部入学者	外部入学者	退学者	その他	女性	男性
第1の立場	24	15	9	0	24	19	5
第2の立場	47	38	9	6	41	40	7
第3の立場	3	2	1	0	3	3	0
第4の立場	20	16	4	3	17	17	3
合計(名)	94	71	23	9	85	79	15

表5 各基本的構えのAC平均値の比較

	第1の立場	第2の立場	第3の立場	第4の立場	第1と3の立場	第2と4の立場
AC平均値とSD	9.83±3.80	11.94±4.41	10.67±5.31	13.65±3.92	9.93±4.01	12.45±4.38
	P(有意差)					* 0.012

* P<0.05 対応のないスチューデントt検定

表6 内部入学者と外部入学者との自我状態・基本的構えの平均値と標準偏差

対象者	CP	NP	A	FC	AC	心的エネルギー総量	自己肯定	自己否定	他者肯定	他者否定
内部入学者(n=71)	9.90±3.05	13.21±3.55	11.25±3.72	11.37±3.91	11.96±4.78	57.69±10.09	6.85±4.27	12.92±4.21	12.52±5.24	8.13±4.45
外部入学者(n=23)	10.96±2.65	13.57±4.39	12.52±3.86	12.65±4.11	11.00±4.25	60.70±6.35	9.52±4.77	9.61±5.03	13.83±5.28	7.04±5.48
P(有意差)	0.141	0.695	0.162	0.179	0.369	0.210	**0.0013	**0.002	0.303	0.341

**P<0.01 対応のないスチューデントt検定

名の自我状態ACの平均値は12.45で、自己肯定の点数が高かった第一の立場と第三の立場の27名のACの平均値9.93との間にP<0.05水準の有意差が認められた(表5参照)。

2. 内部入学生(1群)71名と外部入学生(2群)23名との比較

エゴグラムの各自我状態の平均値、心的エネルギーの平均値、ライフポジションにおける基本的構えの平均値は表6に示した。基本的構えの「自己肯定」の平均値は、1群が6.85±4.27、2群が9.52±4.77だった。また、「自己否定」の平均値は、1群が12.92±4.21、2群が9.61±5.03であった。内部入学生と外部入学生間では、「自己肯定」と「自己否定」にP<0.01水準の有意差が認められた。

3. 退学に至った学生(A群)9名とそうでない学生(B群)85名との比較

エゴグラムの各自我状態の平均値、心的エネルギーの平均値、ライフポジションにおける基本的構えの平均値は表7に示した。基本的構えの「自己肯定」の平均値は、A群が4.56±2.01、B群が7.81±4.61だった。退学に至った学生とそうでない学生間では、「自己肯定」のみP<0.05水準の有意差が認められた。

4. 男女間での比較

エゴグラムの各自我状態の平均値、心的エネルギーの平均値、ライフポジションにおける基本的構えの平均値において、男女間での有意差は認められなかった(表8参照)。

表7 退学者とその他の自我状態・基本的構えの平均値と標準偏差

対象者	CP	NP	A	FC	AC	心的エネルギー 総量	自己肯定	自己否定	他者肯定	他者否定
退学者 (n=9)	11.66±1.41	13.56±3.40	9.00±3.84	11.33±2.55	12.56±4.98	58.11±7.74	4.56±2.01	14.78±1.79	12.78±4.99	8.78±4.71
その他 (n=85)	10.00±3.06	13.27±3.80	11.48±3.67	11.72±4.11	11.64±4.38	58.11±10.17	7.81±4.61	11.82±4.74	12.85±5.32	7.76±4.73
P (有意差)	0.111	0.83	0.058	0.784	0.555	0.999	*0.039	0.068	0.97	0.543

*P<0.05 対応のないスチューデントt検定

表8 男女の自我状態・基本的構えの平均値と標準偏差

対象者	CP	NP	A	FC	AC	心的エネルギー 総量	自己肯定	自己否定	他者肯定	他者否定
女性 (n=79)	9.96±3.01	13.46±3.62	11.53±3.61	11.73±4.12	11.73±4.71	58.42±10.13	7.27±4.51	12.34±4.53	12.60±5.40	7.95±4.85
男性 (n=15)	11.2±2.68	12.47±4.42	11.73±4.68	11.4±2.80	11.67±2.53	58.47±9.27	8.73±4.53	10.87±5.07	14.13±4.34	7.40±4.01
P (有意差)	0.141	0.351	0.851	0.767	0.957	0.986	0.251	0.259	0.301	0.681

V. 考 察

エゴグラムの結果から本学生の傾向についてみると、自我状態のNP・FC・ACが高い点数に分布しており、各自我状態の平均値はNP・AC・FC・A・CPの順に高かった。また5つの自我状態では、AC優位が32名と最も多く、次いでNP優位が28名、A優位が18名、FC優位が19名、CP優位が6名であった。

エゴグラムで一番高い部分は、何か問題が生じた時、あるいはストレスの下で、直ちに反応する自我状態であり、一番低いところは心のエネルギーの給付が最も手薄になっており、性格の中でかなり不活発な部分¹⁰⁾といわれている。本学生において一番高い平均値であったNPは「養育的な親」の自我状態といわれ、親切・思いやり・寛容な態度を示す部分で¹¹⁾、これまでの看護師や看護学生のエゴグラムに関する研究から、看護師や看護学生はNPが高い傾向があると報告されている¹²⁻¹⁶⁾。そのため、NPが高いことは援助職である看護師をめざすものとしては望ましいと考える。NP優位タイプは、他人を認め、強制を排し、十分な思いやりをもって接することができる人といわれるが、反面NPが過剰になれば過保護やおせっかいになりやすく、NPが不足すれば他者の立場に対する理解や配慮に欠け、他者への関心や共感能力が乏しいといわれている¹⁷⁾。本学生の各自我状態の心的エネルギー分布でみると、NPの過剰(18点以上)は9名(9.6%)であり、NPの不足(9点以下)は16名(17.1%)であった。とくに過剰や不足している学生が多くは占め

ては少ないが少数みられており、実習中に患者の自立を妨げ依存されるほど援助しすぎていないか、または患者や他の学生への関心や理解不足がないかなどサポートしていく必要がある。

優位者が32名ともっとも高く、自我状態の平均値でも2番目に高かったACは、「順応する子供」の自我状態といわれ、自分を抑え社会規範に従って行動する傾向を持つ。AC優位タイプは他人依存の“自分がない”人で、いつも相手の期待に添おうとするといわれている。ACが過剰だと情緒的に不安定な傾向を持ちやすく神経質で劣等感も強い。また、困難に耐える力が弱く、困ると他人に頼る傾向がある。反対にACが不足すれば、非協力的で頑固で融通がきかないといわれている¹⁸⁾。本学生の各自我状態の心的エネルギー分布でみると、ACの過剰は9名(9.6%)と多くは占めていないが、20点満点のものが5名(5.3%)みられており、AC優位者のAC平均値は15.78±3.03とCP・NP・A・FP優位者のAC平均値と比較しても高かった。また、ACの不足は30名(31.8%)と約3分の1近くを占めていた。このように、ACが過剰の学生と不足している学生とが混在していると、非協力的で頑固で融通がきかないものと他人に頼る傾向があるものなどで実習中などにグループ内で協力体制が取れず、周囲との不適應を起こすことも考えられる。そのため、グループ間の役割調整や声掛けを行い協力関係がとれるような働きかけを行っていく必要がある。

自我状態の心的エネルギー分布で特徴的なのは、CPの不足が40名(42.6%)、ACの不足が30名

(31.8%), A の不足が 28 人 (29.8%), FC の不足が 26 名 (27.6%) であった。CP の平均値や CP の心的エネルギーが低いと、こうすべきであるという価値付けできない傾向になりやすい。このことから、CP が不足している学生が多いということは、不平不満はあまり言わない半面、規則等に従うことが苦手な責任感が乏しい傾向が予測される。看護師の行動には、瞬時の判断と即座の行動が必要であり、そのためには A (考える私) と CP (価値付ける私) が機能するような学習が要になるといわれている¹⁹⁾。情報を整理・判断・分析するなかでとくに A の機能を、倫理観を育てていく関わりをなかで CP の機能を高めていくことが必要だと考える。

また、集団の中でエゴグラムのとこが高い人が多いか、とこが低い人が多いかをみることで、その集団の特徴がみることができるといわれる²⁰⁾。調査した本学生は、CP が低く AC 優位者が多いことから、自分に自信がなくまわりに影響されやすい傾向があると考えられる。しかし、AC 優位者が多い反面 AC が不足している学生も 31.8% みられる。このことから本学生は、他者の影響を受けやすくまわりに気を遣いながら行動する傾向のある者と協調性が低く自分中心に行動しやすい者との相反する学生が混在している特徴がみられる。また、CP の機能が不活発な学生が多く、友好的で他人を批判・攻撃しない反面、規則等が遵守しにくいことも考えられる。これらの特徴より、何か問題が生じたときに AC の自我状態が反応し、自分の信念にもとづいて自己主張し自分勝手に行動する学生と自己主張せずその学生に合わせて行動する学生とで指導が入りにくく混乱する可能性も示唆される。

本学生のライフポジションテストの基本的構えの平均値は、自己否定と他者肯定が 12 点台と高い点数に分布し、自己肯定と他者否定が 7 点台と低い点数に分布していた。基本的構えとは、自分と他人との関係について下す結論、つまり人生に対する態度である²¹⁾。この人生態度である基本的立場は 4 つに分けられ、第一の立場とは自己他者とも肯定の構えをとるもので、人間同士としての共感に支えられた、血の通った交流を行うことができる理想的な構えである。また第二の立場は、自己否定で他者肯定の構えをとるもので、自己卑下や劣等感に悩み憂鬱になりやすい人がとる構えである。第三の立場は、自己肯定で他者否定の構えをとるもので、独善、他罰主義、他人不信などの心境で、攻撃的、反社会的な言動になりやすい構えである。第四の立場は、自己他者とも否定の構えをとるもので、

虚無的な心境で、人生に絶望した自棄的な生活や自殺などを招きやすい構えである²²⁾。しかし、これらの人生の態度はその立場に 1 日 24 時間とどまっているのではなく、そのうちの 1 つに基礎を置いて刻々と人生の立場の間を移行している²³⁾といわれている。

本学生のライフポジションの結果から基本的立場の割合をみると、第一の立場が 24 名、第二の立場が 47 名、第三の立場が 3 名、第四の立場が 20 名であり、第二の立場が一番多くみられた。第二の立場も第四の立場も、自分に対して自己肯定感を持たず自己否定的な傾向がみられる。自己否定の構えを持つものは、自分のできていないところ劣っているところに目を向けやすく悲観的になりやすい。そのため、自分自身を攻撃し心のエネルギーが消耗しやすい。

基本的な構えと自我状態には一定の関係があり、自己否定の構えを持つものは自我状態の AC が高くなる傾向がある²⁴⁾。本学生においても、自己否定の構えをもつ第二、第四の立場をとる 67 名の AC の平均値は 12.45 で、自己肯定の構えをもつ第一、第三の立場をとる 27 名の AC の平均値 9.93 より高い値をとっていた。一般的に AC の機能が高いと、その特性から自信や自己肯定感が持ちにくく自分を抑えストレスが蓄積しやすい。そのため、自分の気持ちを抑えることが減少して自然な感情を表出できるように、学生の感情や意見を尊重するような関わりが大切だと考える。

5 つの自我状態の総合点数である心的エネルギーは、100 点満点中平均 58.43±9.90 点であった。心的エネルギーは何かをしたいと思う衝動の原動力となる本能エネルギーであり、精神的なストレスや疲労で心的エネルギーは消費される。本学生は、自己否定の構えをもち AC が高い自我状態を持つものが多かった。山蔦²⁵⁾は、否定的な自己イメージにとられる場合、他者評価への臆病さや敏感さが生じ、他者との自然なコミュニケーションを阻んでしまうことがある。ここで他者評価への臆病さや敏感さは他者に対する「気づかい」ではなく、エネルギーをも削り取る「苦しいもの」であると述べている。このことから、本学生はストレスが蓄積しやすく心のエネルギーが消耗しやすい自我状態のものが多いと考えられる。自己肯定感が持てず AC の機能が高い学生が、自分のよい部分に意識を向け自分に自信を持つことで、他者からの評価などにすり減らしてきた心のエネルギーを高めることが出来ると考える。そして、自己肯定感がもてるようになることで、人からどうみられているかにエネルギーを注ぐことが減少し、自然なコミュニケーションを築く

ことが出来るのではないかと考える。

内部入学者（1群）と外部入学者（2群）との比較では、基本的構えの「自己肯定」の平均値と「自己否定」の2つに有意差が認められた。この結果から、内部入学者は自己肯定感が低く自己否定感が高い傾向にあることが考えられる。

また、退学に至った学生（A群）とそうでない学生（B群）との比較では、基本的構えの「自己肯定」の平均値に有意差が認められた。この結果から、自主退学する学生は、自己肯定感が低いという結果が明らかになった。また、A群とB群において自我状態のACに有意差は認めなかったが、A群9名のうち2名はACの過剰（18点以上）であった。

今回、当学院の学生の自我状態や基本的構えの特徴を知るとともに、自己退学に至る学生とそうでない学生にどのような差異があるのかを明らかにするために調査を行った。その結果、自己退学に至る学生とそうでない学生には、自己肯定感に差異があることが明らかになった。

「自分が自分であって大丈夫」という自己肯定感を高めるには、受容や共感が大切であり、その自己肯定感には人間の成長や発達に影響するといわれている²⁶⁾。そのため、「受容・共感すること」として教育者が理解して意識的に行っていくことによって、学生の自己肯定感も高めていけるのではないかと考える。

しかし、自己肯定感が持てず不登校や社会的ひきこもりという状態になったとき、そこから立ち直り自らを解放していく主体は子どもや若者自身なのであり、周囲の親や教師、カウンセラーや援助者はそれを手伝う脇役でしかなく、その認識を欠いた押しつけがましい一方的な「援助」は、侵襲的に子どもや若者たちを追い込んでいくと高垣²⁷⁾は述べている。そして、当人が自分で自分を「直して」いく主体になろうとするときに、もっとも障害になるのが「自己否定の心」である。自己否定の心から彼らが自分を解放していけるように援助することが、援助の要諦であるとも述べている。学生が自己否定せず自己肯定感を自ら高められるように教育者が関わることで、学生の人間関係能力を高めるとともに自己退学する学生を減少させることに繋がるのではないだろうか。

VI. 結 論

1. 本学院の調査対象学生では、自我状態の平均値ではNPが一番高いがAC優位の自我状態が一

番多かった。なおかつCPやACの不足する学生の割合が多くみられた。また基本的構えは、自己否定・他者肯定型の第二の立場に立つものが一番多くみられた。

2. 内部入学者と外部入学者との比較では、自己肯定と自己否定に有意差が認められた。
3. 1年以内の自己退学者とそれ以外の学生間では、自己肯定に有意差が認められた。
4. 男女間での有意差は認められなかった。
5. 学生が自己肯定感を高めるように関わることで、自己退学の学生を減少させることに繋がる可能性がある。

謝 辞

忙しい中、調査に協力して下さいました学生の皆様に感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 1) 厚生労働省. 看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査. 2012 [引用 2013-03-28].
URL: <http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001102798>
- 2) 福島県教育センター. 豊かな人間関係を育む指導援助に関する研究 第2年次. 2000 [引用 2013-04-14].
URL: http://is2.sss.fukushima-u.ac.jp/fks-db/txt/60000.kiyou/kiyou_vol.028/kiyou_vol28_120/index.html
- 3) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康. 交流分析とエゴグラム 3. 東京: チーム医療; 1986. p.9.
- 4) 桂戴作, 杉田峰康, 白井幸子. 交流分析入門 2. 東京: チーム医療; 1984. p.9.
- 5) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康. 交流分析とエゴグラム 3. 東京: チーム医療; 1986. p.29.
- 6) イアン・スチュアート, ヴァン・ジョインズ著, 深沢道子監訳. TA today: 最新・交流分析入門. 東京: 実務教育出版; 1991. p.147.
- 7) 高垣忠一郎. 私の心理臨床実践と『自己肯定感』. 2009 [引用 2013-04-14].
URL: <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/san-sharonshu/451pdf/03-02.pdf>
- 8) 日本交流分析協会編. 交流分析士2級TAシート. 2011.
- 9) 武藤眞佐子. エゴグラムからみた看護学生の特徴. 岩手女子看護短期大学紀要 1995; 3: 17-32.
- 10) 桂戴作, 峰康, 白井幸子. 交流分析入門 2. 東京: チーム医療 2; 1984. p.39.
- 11) 桂戴作, 峰康, 白井幸子. 交流分析入門 2. 東京: チーム医療 2; 1984. p.10.
- 12) 大塚邦子, 石松直子, 大内田真澄, 江田柳子. 卒後1年目看護師のエゴグラムの変化と職場適応との関連. 日本赤十字九州国際看護大学紀要 2005; 3: 68-76.

- 13) 武藤眞佐子. 看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化. 北海道大学医療技術短期大学部紀要 1999; 12: 75-86.
- 14) 任和子, 豊田久美子, 中井義勝, 菅佐和子. エゴグラムからみた看護学生の自我状態の変化. 京都大学医療技術短期大学部紀要別冊 健康人間学 1997; 9: 73-8.
- 15) 梅津靖江, 吉岡伸一, 福田倫子他. 看護学生の思いやり行動と自我状態の学年比較. 米子医誌 2009; 60: 192-201.
- 16) 白鳥さつき, 看護学生の職業社会化に関する研究. 山梨医大紀要 2002; 19: 25-30.
- 17) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康. 交流分析とエゴグラム 3. 東京: チーム医療: 1986. p. 27-83.
- 18) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康. 交流分析とエゴグラム 3. 東京: チーム医療: 1986. p. 39-62.
- 19) 武藤眞佐子. 看護短期大学学生の3年間のエゴグラムの変化. 北海道大学医療技術短期大学部紀要 1999; 12: 82-5.
- 20) 新里里春, 水野正憲, 桂戴作, 杉田峰康. 交流分析とエゴグラム 3. 東京: チーム医療: 1986. p. 133-9.
- 21) 杉田峰康著. 医師・ナースのための臨床交流分析入門. 東京: 医歯薬出版: 1990. p. 1-216.
- 22) 桂戴作, 杉田峰康, 白井幸子. 交流分析入門 2. 東京: チーム医療: 1984. p. 99-103.
- 23) イアン・スチュアート, ヴァン・ジョインズ, 深沢道子監訳. TA today: 最新・交流分析入門. 東京: 実務教育出版: 1991. p. 150.
- 24) 桂戴作, 杉田峰康, 白井幸子. 交流分析入門 2. 東京: チーム医療: 1984. p. 106-8.
- 25) 山蔦圭輔. ストレスの源に関与する——自分を知る. In: 中村友子編. こころの健康を支える臨床心理学. 東京: 学研メディカル秀潤社: 2012. p. 99-101.
- 26) 高垣忠一郎. 心の浮輪のさがし方——子ども再生の心理学. 東京: 柏書房: 1999. p. 65-197.
- 27) 高垣忠一郎. 私の心理臨床実践と『自己肯定感』. 2009 [引用 2013-04-14].
URL: <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/san-sharonshu/451pdf/03-02.pdf>